
IS ~乱れ咲く墮天使~

椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 「乱れ咲く墮天使」

【NZコード】

N1642Z

【作者名】

椿姫

【あらすじ】

香りの無い花の主人公他が、ある程度引き継がれた状態で始まる第一のIS物語。ここに開始

「こ、こ、こ、HS学園

言わざと知れた『インフィニットストラトス』という大仰な名前の
兵器を使える者を育成するための学校だ
その巨大とはいかなまでも中々に大きい校門の前、そこに、俺たち
は立っていた

「俺の名は朱雀楓、まだ名前は無い」

色鮮やかとはお世辞にも言えない血の様な長い紅髪を風になびかせ、
満足げにつなずく少女、それが俺だ

つて誰が少女だ、だれが。俺は男だ

「思いつきり名乗つてるじゃないの、しかもその発言はかなり痛い
わよ」

俺の横にいる、茶髪の女に黒光りする硬い物で殴られる。ぶつちや
け真黒な金属バットだ、何処から出てきたのか、なぜ持っているの
か。そこは氣にしてはならない

「楓・・・髪が真っ赤なせいで何処から出血してるかわからない」
今度は反対方向から、気遣うような声が聞こえる。見ると、濡れて
いるかのようなつややかな黒髪を腰のあたりまで伸ばし、メガネを
かけている少女がこちらを見ていた

「平気だ平気、こんなのすぐ治るぞ」

それは虚言ではなく本当だ。なぜか俺は怪我の治りが異常に早い。
おそらくどんなダメージを受けても死ない。まだ試したことはない

いが

「そう？？それにしても・・・いつまでいるの？？」

黒髪の少女が時計を確認する

もうとっくに待ち合わせの時間は過ぎてこる。こつまで待たせる気のだろ？

「・・・ん？？」

俺の目が何かを捕える。それは黒くて、全身装甲の・・・

「あ、襲撃されてる」

「嘘ー！？」

見事なまでのシンクロ突っ込み。拍手。

「・・・どうするか、一応学園の専用機持ちが出でるみたいだが・・・

・
「退屈だから行つてきなさい」

「マジかよ深雪、へたすりや死ぬるぞ」

「あんたは頭吹き飛ばされても死にやしないわよ。今後のためにも自分の実力を見せときなさいな。あれ無人機っぽいし」

深雪と呼んだのは茶髪の方。ちなみに黒髪の方は朱雀白雪。ぶつちやけ妹だ。しかも双子の。

その割には全然似てねえがな。まず髪の色も違つてしま田の色だつて白雪は髪と同じく黒なのに

俺はなぜか右が紅で左が蒼のオッドアイだ。一体どここの邪氣眼だつづつの

顔の方はなぜか似てるらしいんだよな。俺が白雪に・・・

「無人機？？そんなんまで作りだすんか、あの女は」

俺が思い出したのはウサ耳付けた・・・やめよ、これ以上はだめだ

「本気で暴れられるなら行つてくるぜ。で、どれで行く？？」

「今日は・・・校舎とか配慮して月影、武器は紅羽と蒼月だけね

「マジか、遠距離系無しか」

「アンタ命中させられんの？？」

細められた目からは凍てつくような視線が飛んできている。こつそ

のこと死にたくなる

「点じや無理だな、いつてくる」

深雪の視線を振り切るため、戦闘している所まで走る。上では、黒い無人機と白い専用機が戦っている

「そうだ、ちょっとからかってやろつと」

俺が思いついたのは、割と良くやる方法だった。簡単にいえば・・・

「あ～。あ～。これくらいの高さでいいだろ」

名づけて、女装大作戦！！

・・・ごめんなさい、調子に乗りました

「そこの人！…どいて…！」

ソプラノの声で、白いISに声をかける。女装大作戦の方法は簡単。ただ声を女性のものにするだけ

『だれだ？？危ないぞ…！』

思つた通りだ、こいつ騙されてやがる。ニシシ

・・・というのも本来ISは女性にしか扱えず、男はいない、はずなのだが、今上空で戦っている、『織斑一夏』は、起動することができている。俺もなんだが、そこは今どうでもいいつまり、織斑が疑問を抱かないといふことは、男とばれていないと

いつことだ

「いいからどいて…！…そいつは私が倒すから…！」

言うのと同時に俺はISを装着する。白と黒のカラーリングに、背中には一枚の翼。天使のようなそれは、少しばかり黒くなつており、いうなれば堕天使。闇に墮ちた哀れな天使の姿

「月影。降臨」

実際飛びながらなので降臨ではない。むしろ昇臨だ

「赤羽、蒼月」

武器を呼び出し、無人機を切りつける。それぞれの色をした二つの刃は、易々と装甲を切り裂き、破壊した

「・・・？？」

あまりにすっぱり切れ過ぎる、二いつ、もしかして・・・

「す・・・すげえ」

織斑一夏が驚嘆の声を漏らすのがわかる。それにしてもつまらん。もつと遊びたいな

「ねえ、ちょっと遊ばない??」「は??」

突然そんなことを言われて戸惑っている織斑一夏

『だめよ、何しようとしてんの』

そこで、深雪の制止が入る。全く、地獄耳な奴だぜ

『そこ、聞こえてる』

「おーおい、地の分まで読めるようになったのかお前

未恐ろしいやつちやな、主に俺の生命において

『いいから戻ってきなさい。先生が来たわよ

なんと、あれからそんなに経つていなイゼ

「りょーかい」

地上200mほどの高さ、これくらいなら問題ないな
という訳でその場でIRS解除、落下する

「あ、おい!!」

織斑一夏が吃驚しているが、俺にとつてはどりでもいいのだよ。ふ
ははは・・・・

あ、着地準備忘れた

「ズツードオオオオオオン!!!!!!」

盛大に音を響かせ、地面へと着地した俺。普通の人間なら叩きつけられたトマトがごとく地面に汚い花を咲かせていく所だが、俺は人と比べてかなり頑丈なので特に傷は無い

嘘ついた。地面に足突き刺さったわ。膝くらいまで

「あんたねえ・・・どうして普通に降りてこられないわけ??」

「やっぱり最初のインパクトって大事かなって思つてや」

「やりすぎだよ・・・お兄ちゃん」

・・・やべえ!! 相変わらず白雪は萌える!! 今の時代に『お兄ちゃん』って呼ばれるつて!! ほんとに可愛いなこの娘!!

「選択権をあげるわ。今すぐここで死ぬか、大人しく死ぬか」

「どっちを選んでも死ぬんだね!!」

深雪に睨まれたので黙ることにしまーす。

「・・・それで?? 男がいるつて聞いたのだが・・・居ないのか? ?」

あれ?? 僕女として認識されてる?? 何で?? ・・・あ、声が高いままか

「・・・俺が、そうです」

声を元に戻し、改めて田の前の人物を見る

「む・・・そうだったか」

田の前に立つスースイ姿の女性は織斑一夏の姉、織斑千冬だ

そう言えばこの人・・・ブリュンヒルデ、だったか??

「今日からこの学園に転入する、白石深雪です。こちらは朱雀楓、それと朱雀白雪です」

深雪が淡々と紹介をすませる。ほんとこいつは二つ二つの得意だよなあ・・・

「私が、今日からお前たちの担任になる、織斑千冬だ。うちのクラスは専用機持ちが他と比べると多くてな、大変だと思うが、まあがんばれ」

「質問いいっすか??」

すかさず質問。気になることは早めに言ひべし

「何だ」

「さつきの無人機・・・わざわざ破壊する必要なかつたんじゃないですか??」

「ですか??」

「・・・どうしたことだ？？」

織斑先生が不満げに俺を見る。そりやそんなんだが・・・だって「あれ、偵察用で武器はもちろん、最低限のエネルギーしかなかつたし。装甲はもういいし。」

切りつけた時、妙にスパツといったから気付けたのだが、一見しただけじや遜色ないからなあ・・・

「つてまでよ？？先生、あれの相手をしていた男つて先生の弟ですかね？？・・・うわ、弱つ」

偵察機」ときに手間取つてたのかよ

「アイツはエスに乗つてから一ヶ月もたつてない。むしろ飛べただけで上出来だらう」

そんなに使いこなせてないのか・・・あーあ

「・・・む、時間だな、行くぞ」

時計を見ると朝の八時まで時間が無かつた。

「お前たちは私が呼んだら入つてこい」
そう言い残し、先生は教室へと入つていく
「いよいよね」
「そうだね、学校か・・・どんな所なんだろ」「ごめん、一ついいか??」
「何??」「うん、何じゃないよね。何で俺が女子の制服着てんの??」
「いつ着替えさせたんだコラ」
「今の服装。なぜか俺まで女子の制服を着させられている。って待てる
オイ

「壮大な誤解を生むよなこれ。そこ、田をそらすな」
「・・・」
「うわあ・・・最悪だわ・・・」
「初日から変態のレッテル貼られるとかないわ・・・」
「大丈夫じゃない??ばれないわよ」
「ばれるばれないの問題じゃねーんだよ深雪さんよお。^{ディープスノ}」
「ここに男子の制服あるよ。」

「おお白雪！助かるぜ……『X』だけど……大きすぎるだ
ろうが白雪。スノーホワイト なんでお前そんなん持つてるんだよ。ギャグにしても
やりすぎだ。ぶつかぶかじやねえか」

何でこんな時にギャグしかできねーんだ」の双雪達は
「つてあるじやんかよ普通に」

「つてあじめんかよ普通」「ん」

わいせと着替えるとするか・・・・・

「入れ
「はい
「うぶ～つか
「わざわざとおめでたすかよ・・・

! ! ! ! !

原作と同じ感じなのでHRは割愛

休み時間。俺の両サイドにそれぞれ白雪と深雪がいる陣形で、俺たちはあることについて話して呑っていた

「やつぱりあれよね・・・」

「うん・・・」

「どうかこれは間違いないだろ。」

何の話かといふと

「半分ぐらいい隣とされてる・・・」

織班一夏、フリゲ 建築士今日も絶好調の様子

「これは・・・予想以上だ・・・」

進行度で言つたら80%ってといふか。非常にヤバい。だって一力

用くらいしかたつていないんだぜ？？

「ねえねえ・・・朱雀君？？」

と、クラスの女子が話しかけてきた

「何でしょうか？？」

女声で返してみると

『・・・・・』

予想通り、睡然としている

「馬鹿なことしないの」

「ドゴオッ」

ものすん！」に音がした。って殴られたのは俺か

「お兄ちゃん！？」

机にうつぶせて悶える俺を心配そうに撫でてくれる白雪。ああ・・・癒される・・・

「ちよっと。ようじくて？？」

ああ・・・このまま時が止まつたらいいのにあ・・・

「無視とはい度胸ですわね・・・」

「あ・・・あの・・・」

深雪が声をかけているが声の主は「あなたには話しかけていませんわ！！」と怒り心頭のご様子

「・・・どなたですか？？」

白雪も加わるがやつぱり「私がようがあるのはこの男であつてあなた達ではありますんわ！！邪魔しないで下さる？？」と突っぱねている。ん？？いま、白雪に向かつて言つたよな・・・？？

「オイそこの金髪ロール。選択肢を与えてやる」

「やつと気付きましたわね？？下等な男のくせに・・・

「頭跳ね飛ばされて死ぬか、脳髄ぶちまけて死ぬか」

「シユラアアアアア・・・・」

同時に、首に蒼月を、頭にB-O9（俺の愛用のハンドガン）を突

き付ける

「な・・・なんて無礼なこと・・・」「ガーンー！」「・・・今のは威嚇だ、次は本当に死ぬぞ」・・・わかりましたわ、だから武器を降ろしてくださいさる？？」

「無表情のまま、武器を収納・・・せずに粒子状のまま待機させておくまずはそつちの要望から聞こづ。何の用があつて俺に話しかけてきた？？」

「今となつては欠片ほども価値がありませんが・・・まあいいでしょう。単刀直入に言いますわ。朱雀楓、私と勝負してくださいさる？？」

「断る」

「曜日は追つて・・・へ？？」

唖然とする金髪ロール。俺なんか変なこと言つたか？？

「そんなことより俺の要件だ。単刀直入に言つ。白雪に謝れ！..」

「あたしは！？」

深雪が何か言つているが無視、白雪に暴言を吐くイコールで死につながるのだ。本当は、だが

「な・・・それよりも決闘・・・」

「決闘なんていつでもできんだろうがまず最初に白雪に謝りやがれこの英國痴女！..」

「な、何ですつて！？私に向かつてえ、英國痴女なんて！..」

「お前なんか「検閲削除」で「検閲削除」だろうが！..」

「下ネタ言つてるよう見せかけてるけど自分で検閲削除つて言つてるせいで何が言いたいのか全く伝わってきませんわ！？」
俺のボケに的確に突っ込んだ、だと？？

「ふつ・・・セシリ亞・オルコットよ」

「な・・・なんですか、いきなり」

「いい突つ込みだ、気に入つた。勝負だか何だか知らないが受けて立とうじゃないか」

「なんか良くなきゃいけないけど曜日は後日お知らせしますわ」

ほう、痴女にしては言い心構えだ、だが・・・

「その必要はねーよ、だろ?? 千冬センセ」

「・・・織斑先生、だ!!!」

「ゴオツ!!!!」

刹那、あいているドアから高速で飛来してくるものが目に映った。狙いは正確に俺の頭だ。でもその攻撃は俺には届くことはない。なぜなら

「おい・・・楓・・・」

織斑一夏が出席簿を、いや、出席簿を止めたものを指差す

「ああ??呼び捨てにすんなよ、馴れ馴れしいな」

「お前・・・それ・・・!!」

「風がどうかしたか??」

俺の前で飛来した物体、というか出席簿は止まっている俺の特殊能力、イヤ大したもんじゃなくてE.Sの力なんだけどね

「朱雀、返せ」

「りょーかいつと」

そのまま弾き、本来の持ち主のところへ返してやる

「授業だ、席に着け」

先生の一言で、まるで訓練された軍隊の様なスピードで席に着くクラスマイト達。ほんとこことどんな教育してんだよ、軍隊みたいな動きするなんてきいたことねえ

「唐突だが、今日はクラス代表を決める。自薦他薦は問わん。誰かいるか??」

「唐突過ぎて意味わかんないんだけど」

「・・・ゴツ」

「誰なら任せられるとかでもいいんですか??」

「そうだな、それで構わない」

しかし、一夏は退場中、オルゴットは黙りこくれているので何とも言えない空気が漂う。これは・・・

「先生、私は織斑君がいいと思います」

キター！！！！！

「ほう・・・他にはいるか??居ないなら織斑で決まるが」

「ナイスだ名の知らぬクラスメイト!!コレで俺の安泰は確定だ!!」

「・・・納得いきませんわ!!」

そこで立ち上がるかオルコット嬢・・・

「代表にふさわしいのは力を持った人間ですわ!!そんな役職を極東のサルに就かせるなんて、私に一年間恥をかけというのですか?？」

お??今さらっと日本を馬鹿にしたよな???

「実力でいえば私がなるのは自明の理!!そもそも私は猿と一緒に部屋で学ぶこと 자체が不愉快なんですの!!まったく・・・サークスに来てるんじゃありませんのよ!!」

「・・・黙つて聞いてりや好き勝手言つてくれるなあ??英國痴女」

「イギリスだつて大した御国自慢ないだり。マズイ飯で何年覇者だよ」

・・・さすがに我慢の限界だつた。俺と一夏はそろつて席を立ち、オルコット嬢を睨みつける

「猿??じやあお前たちは何だ??虫かなんかか??」

「おいおい言い過ぎじゃねえか一夏。それに虫に失礼だ。こいつらは「形容できないもの」とでも名付けようぜ」

「そりゃあい。ん??急に黙つちまつてどうした??ビビつたか??」

「バーカ、さすがにやりすぎたんだつて。オルコット嬢、という訳だ、クラス代表は諦めてくれ。ここにいる一夏ががんばってくれるからさ」

「いや待て楓。俺はやるなんて言つてないだろ??が」

「他に候補がないんだ。仕方ないだろ??」

「じゃあ先生、俺は楓を推薦します」

「うわ、やると思ったよ。何で俺が巻き込まれなきゃなんねーんだ。
・・どうしたオルコット。まさか、そんなちっこいもんで俺を殺れ
るとでも思ったか？？」

近接ブレード『インターフェプター』を構えて突っ込んだオルコット嬢だが、俺の風の結界に阻まれ、逆に磔にされてしまう。といふか俺がやつたんだがな。

「甘かつたな、あと少し早ければ傷つけられたかもしれないがな」「くつ・・・！」

「どうしようかな？？『規制』してもいいし『規制』させるのもいいかもな・・・いつそのこと両方やる？？それとも謝つて無事に終わりを迎える？？」

とはいってもこいつは謝ることはしない。何せプライドが高いから。そして俺も別にやらしい目的で磔にしたんじゃない。必要なんだ、こいつがどんなスペックを持ち、どんな知能を備え、ビのよつこのばすのが最適か、分析するために

「誰が・・・猿なんかに・・・」

「OK、じゃあこうしようと。クラス代表を、バトルで決めよう」「・・・どうこうことだ??」

「察しろよ馬鹿。ちっこい剣」ときじや俺は殺せないが、EVAならエネルギーを消費させればいいし殺すことはできなくとも勝つことはできる。つまりだ

「きわめて安全に・・・しかし禍根を残さず勝者を決定できると？？」

「そう言つことだ。さすがオルコット嬢。御明察だ。先生、それでいいですよね？？？」

「・・・そうだな、良いだろ？」

こうして、先生の承諾を得て、俺たちはクラス代表決定戦を行つことになつたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1642z/>

IS ~乱れ咲く墮天使~

2011年12月5日22時52分発行